



けりて道なきは友達のあそびに泣かぬ

よの河そよふ葉よころり時多小

時多小ねももむらもむら小

ちをを風よその子花を小

風中し花よむらむら小

桜さくきよむらむら小

花よよおむらり月おれ小

時多小むらむら小

小北家道むらむら小

小北家道むらむら小

塵を積むとけむら小

花よよ時多小むらむら小

けりて道なきは友達のあそびに泣かぬ

明光

救済

良河

由原

宗柳

小月

小月

小月

同

同

春は花多の多しあふれ

花一平の文字の密に

花の枝もつらつら其心

小ねを折子もむらむら小

花もあふれ當年花候河

けりて道なきは友達のあそびに泣かぬ

志つてやよむらむら小

よて祇土又大事の候

おむらむら小

月の御影花よむらむら小

はあふれ折子もむらむら小

りや花を折子もむらむら小

親當

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

いそぐりの愛句のゆに志れをそはせりか
いしと君をさくも西のゆき

此の足し花の多作のまき 心敬

そまきのあまらぬうたまは入内侍も
いゆはまき世書世ののき愛りともゆき

花みんのゆきさうきまき心敬

そまきのあまらぬうたまは入内侍も
いゆはまき世書世ののき愛りともゆき

花みんのゆきさうきまき心敬

そまきのあまらぬうたまは入内侍も
いゆはまき世書世ののき愛りともゆき

花みんのゆきさうきまき心敬

そまきのあまらぬうたまは入内侍も
いゆはまき世書世ののき愛りともゆき

花みんのゆきさうきまき心敬

ゆめしつ花のこまきまき心敬
二條園白殿

よるも浪月といつこのまき心敬

うきまきと輪もまき心敬

はあつともまきとつれまき心敬

花みんのゆきさうきまき心敬

そまきのあまらぬうたまは入内侍も
いゆはまき世書世ののき愛りともゆき

花みんのゆきさうきまき心敬

そまきのあまらぬうたまは入内侍も
いゆはまき世書世ののき愛りともゆき

花みんのゆきさうきまき心敬

そまきのあまらぬうたまは入内侍も
いゆはまき世書世ののき愛りともゆき

花みんのゆきさうきまき心敬

當所の安否の事ありて安否ともいふなり
一箇の月神事ありて神事たり人たり
子と申之となす

一税中三にもち実物名 昔後三月
一税つと付てなる 移其付てなる
あしとも 恨も又つと付てなる
有し太し 恨も又つと付てなる
一箇の月神事ありて神事たり人たり
子と申之となす

さやう有し
神事たり人たり 一箇の月神事ありて神事たり人たり
子と申之となす

と物語し傳へし... 事記の... 一... 事記... の事...

二月の末廿... 社子...

佛を... 事記... 事記...

奇この... 事記...

こと... 事記... 次...

師の... 事記... 事記...

一... 事記... 事記...

い... 事記... 事記... 事記...

月よ前より花ははせのぬるして
かきしこれより初めはけり云流道断は持
中舌常世を能く御流し合て句の交りとも
詞をいふらうて可化ゆるし下付れは連歌
のあそび常世をたこ業世にし行れは詞はけり
これより作らるるをいふあそびにしは
一漢のり初初初のりかてけりなりぬ何
若漢のりちよらり二百はて後いつまで
何よりとほらるる只今の三百も後うてはあそ
びくるよしを何の所は初初初のりか
てけりなりし其流りなり

車のためは家一海をい
人のいささう備のむさうの時さ
とほら前自はた大なるうらりしと
る世た世のり備の目けの目むし
る心か車とあひひんをいふは
流りししを御合をちとち初はち
あそびし事とあそびしよらうて
大のりあそびをいふは
けをいふはちのりち印のり
妃照君うちのり考は
一神流にぬるははちゆらたため何


~~~~~  
欠如と云ふは、いづれも、  
奉ておとすは、  
の心と云ふは、  
りも、  
けく、  
を、  
や、  
寅、  
け、  
一、  
の、

~~~~~  
連、
形、
一、
具、
大、
を、
今、
一、
然、
但、
と、
ゆ、

ろを山虎の丸をを若敷とて侍るに連敷と
申うて侍たりしよしとさうしむ侍るよし
茶入れの縁こらぬの月のあかりの光
あふをねて侍りしよしとさうしむ侍るよし
少申はまを侍るのよしとさうしむ侍るよし
よふ侍るよしとさうしむ侍るよし
るよしとさうしむ侍るよし

一 案をいし前ふ案をる案の前ふをり
めりやうの侍るよしとさうしむ侍るよし
首をぬて具を後侍れりしよしとさうしむ侍るよし
おまぬ侍るよしとさうしむ侍るよし
して具の侍るよしとさうしむ侍るよし

連敷もいし侍るよしとさうしむ侍るよし
らし侍るよしとさうしむ侍るよし
入て案をいし前ふ案をる案の前ふをり
當付の侍るよしとさうしむ侍るよし
侍るよしとさうしむ侍るよし
口侍るよしとさうしむ侍るよし
るよしとさうしむ侍るよし
侍るよしとさうしむ侍るよし

一 概案のいし侍るよしとさうしむ侍るよし
そを侍るよしとさうしむ侍るよし
度り 案を侍るよしとさうしむ侍るよし
侍るよしとさうしむ侍るよし

あゝ大した事なされてやうに結構ように
紙あはれももあまてゆきと懐紙と揃て
ん各二度は通してその法書の財物
てきて法をいふもいふ合甲てきたなりや
このの具物も作らねた文と好くは
承りよるる物のもや作らねた縁と縁
影何も有るしとやうに守りありま
一も知んけむとあま作らねた
汁まら

一右に一を武蔵玉湯田川糸道きり
志くく合るるり作りしは若くはあま
京こそかか入るよりいふし海きり

くはわれはる向いあまのあま作りしは
縁のあまのあまのあまのあまのあま
只あまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあまの
道のあまのあまのあまのあまのあま
難く又の後のあまのあまのあまのあま
片端つくり作りたるは後とあまのあま
あまのあまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあまのあま

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

あまのこゝろをわすれぬ

ふんせおののゆー
秋山の以りつ木葉ふらつ流して同
るるの月を長きく世のものを
又許の月

月を流して後の川原の粒わらふ
つはりの流はあつ
ちのさるる魚の木のすれ
秋のたつとほれぬん

ふつらゆーとんる月
流のをせまの粒のり
流のをせまのり
新のり又のり身と
おのりぬるる
のり言友の稀るる花
流のりとんは流のり
住一世のり友とるる
はるの金言るる度
さあつららるる
道つとるる
ゆらるる

Handwritten text in cursive script, likely a list or index, starting with a vertical line on the left. The text is written in a dense, flowing hand.

Handwritten text in cursive script, continuing the list or index from the previous page. It begins with a vertical line on the left.

Handwritten text in cursive script, starting with a vertical line on the left. The text is written in a dense, flowing hand.

Handwritten text in cursive script, continuing the list or index from the previous page. It begins with a vertical line on the left.

右 志望 宗氏頼一秘書三月被為教免字

至志也

宮崎

忠古判

文政十二年卯三月

右 以宮崎忠古正本写至志

和風貞文判

文化四年卯九月

右 從松田歳輔写至志

田上實積判

文政六年癸未五月

